

県下最大のため池

大谷池築造の経緯

1 地域発展の礎を築いた大谷池

大谷池は、1945年（昭和20）に旧南伊予村の村長であった武智惣五郎が、干害と水害を防ぐために、心血を注いだ結晶として実現したため池である。貯水量180万m³、灌漑面積1,100haの規模を誇り、県下最大のため池となっている。

周囲は美しい国有林に囲まれ、春は桜、夏は青葉、秋は紅葉、秋から冬にかけては、マガモ・カルガモ・コガモなど2,000羽近くの渡り鳥が飛来する。四季折々の彩りを水面に映し出す景観は、都会の喧騒をのがれて訪れる人たちの憩いの場となっている。

1984年（昭和59）、皿ヶ峰連峰県立自然公園の一環として、周辺部にえひめ森林公園が整備された。1986年（昭和61）には、谷上山都市公園と併せて朝日新聞社の「四国の自然100選」に選ばれた。

さらに、2010年（平成22）には、農林水産省の「全国ため池百選」にも選定された。選定の理由は、次の事実が選定条件を満たしていることによる。①農業振興の貴重な水源として、地域住民の礎になっている。②地域の人々が苦勞して造りあげた築造の歴史が記録に残されている。③豊かな自然に囲まれ、渡り鳥の飛来地として重要な役割を果たしている。④風光明媚で、地域住民の憩いの場になっている。

今日の地域発展の礎を築き、歴史にその名を留める大谷池は、伊予市が誇る貴重な文化的遺産である。

2 大谷池ができる以前の状況

わが国は、古来より瑞穂の国といわれ、二千数百年の長きにわたり、「稲作は国の基」として発展してきた。この地域も早くから文化が開け、米作りの盛んな地域であった。

大谷池ができる以前、この地域の先人たちは、どのようにして米作りをしていたのか、どのような苦勞がありそれをどう克服してきたのか、その足跡をたどっておくことにする。

(1) 米作りと水

米作りに必要不可欠なのが水である。代かきから田植え、刈り取りまでに必要な水量は、愛媛県農林水産部技術指導課発行の『農業気象災害対策資料』によると、普通作で10a当たり14,000m³となっている。これを水深に換算すると、1.4mにもなる。学校の水泳プールの水深は約1mであり、その1.4倍もの水量が全ての水田に必要なことになる。

昔から、この水を雨水や河川水で確保しようとしてきた。ところが、この地方は瀬戸内式気候で降水量が少なく、単位面積あたりの月別降水量〔1890年(明治23)～1955年(昭和30)の65年間の平均〕は、次のようになっている。

伊予市の月別降水量〔1890年(明治23)～1955年(昭和30)の平均〕						単位mm
月	1	2	3	4	5	6
降水量	49.8	62.6	92.9	111.6	119.4	202.7

7	8	9	10	11	12	合計
164.7	116.5	179.8	109.3	71.3	60.1	1340.7

米作りに必要な期間(稲作涵養期間)である4月～9月の降水量の合計は、894.7mmで、この期間だけの降水量では足りない。その不足分を補うために、山間部に降った雨水が流出する河川水を利用してきた。

この地域には、行道山(403m)と谷上山(455m)を頂点とする2つの山塊がある。そこから流れ出る河川には、西の谷川(八倉)、尻無川(宮下)、長尾谷川・宮川(上野)、大谷川(上三谷)、保田川(下三谷)などがある。山が低く谷が浅いために、いずれの河川も流量がきわめて少ない小河川ばかりである。大谷川を除くと、降水時以外は流水もほとんど見られない、いわゆる水無川の状態になる。

こうした、降水量が少ない上に、水量の豊かな河川に恵まれない厳しい自然条件のもとで、人々が工夫したのが雨水や河川水などの自然流水を貯水しておくため池である。

(2) ため池を造る

ため池が造られるようになったのは、米作りが始まった弥生時代からだといわれている。

本格的にため池が造られるようになったのは、戦国の世に終止符をうち、幕藩体制の確立によって国内の政治が安定した江戸時代からである。

江戸時代になると、この地域は、大洲藩唯一の米作地帯であったため、藩は庄屋を中心とした村の自治組織に働きかけ、ため池造りに力を注いだ。

現在、旧南伊予村にある大小40余りのため池は、『大洲領池帳概要』によると、そのほとんどが江戸時代に造られている。

(3) 旱魃の様子

ところが、日照りが続くと、これまでに築きあげてきた40余りのため池の水もたちまち干上がり、旱魃が襲った。



水不足でひびわれた水田

旱魃の様子について、『南伊予村郷土誌』に、次のような記載がみられる。

(現代語訳) 1792年(寛政4)に大旱魃があり、田に秋の実りがなく、大洲藩では、領民の窮乏を思い、免税あるいは減税の令を出した。八倉の場合は、総納税額400余石のうち、340石を免税にした。

1856年(安政3)、1861年(文久元)、1867年(慶応3)、1873年(明治6)、1893年(明治26)、1894年(明治27)、1897年(明治30)にも大旱魃があった。

1873年(明治6)の際は、春以来田植え時期になっても雨が降らず、土用後になって始めて雨が降ったが、ほとんど収穫がなく農民は大変窮乏した。これは、秋冬の雨水を池に溜めず、春雨にのみ頼っていたことが災害につながった。それ以来、秋冬の雨水を池に溜め、干害を防ぐ準備をするようになった。

5 大谷池築造の経緯

(1) 大谷池築造の試み

大谷川は、上三谷字大谷と七折字大谷の境界を流れていることから、その字名をとって大谷川と称した。大谷川は、^{あざ}園桑谷・^{あざめい}本妙谷（平家の落人伝説があることから、「鶯谷」とも呼ばれている）・^{かわが}本谷・^{しり}川ケ谷・^{しり}尻谷の5つの谷川を源流としている。この地域で最も大きな河川であるが、降雨期以外の流量は少ない。

その一方で、梅雨時期や台風時期等に大雨が降ると、勾配が急で流出が速いため、たちまち鉄砲水のような流水となり、下流の平地部では数条に分流し、流出した土砂を田畑に堆積させる暴れ川でもあった。

この大谷川を堰き止め、灌漑用水の確保と洪水による被害の軽減を図ろうとする試みは、すでに江戸時代からあった。

大洲藩では、元禄・享保・宝暦・天明・寛政・嘉永・慶応の時代に7回にわたり調査し、ため池の築造を試みたが、土質や岩質がもろい上に工事中の洪水などにより^{どせつ}挫折したと伝えられている。

明治になってからも、2回にわたって調査・計画が進められ、築堤が試みられたが、「土質・岩質ともにもろく、^{かこいけ}龍池（水のたまらぬ池）になる」との折り紙をつけられ^{どせつ}挫折した。

(2) 武智惣五郎の決断

1921年（大正10）、36歳の若さで南伊予村の村長に就任した武智惣五郎は、就任2年後の1923年（大正12）、長年にわたっての悲願であった大谷池の築造を決意した。

江戸時代に7回、明治時代になってからも2回挑戦したが、ことごとく失敗に終わった大谷池の築造。この前例を知っていながら、なぜ、惣五郎は挑戦しようとしたのか、その動機や真意はどこにあったのか、探っておくことにする。

1つは、村長就任翌年の1922年（大正11）に起きた大旱魃、その翌年の1923年（大正12）に起きた大水害、この2年続きの大災害を身をもって体験したことである。

2つは、旱魃の際には、必ずといっていいほど繰り返される農民同士の水争い（水論）である。しかも、1917年（大正6）の上三谷と下三谷の水論では、下三谷から、上三谷の

代表であった惣五郎自身が訴訟を起こされた^{にが}苦い体験もしている。

3つは、大雨の際に起こる堤防の決壊である。決壊すると、流出した土砂が水田を^{かき}覆い農民を苦しめていた。

4つは、母親シズ存在である。惣五郎という名前は、「佐倉惣五郎のような人のためになる人間になれば」との願いから母親のシズが名付けたといわれる。尋常小学校、尋常中高等小学校を卒業後、上級学校への進学を希望したが、母親シズは「長男は進学せず、村のために働け」と言って進学を許さなかった。あれほど切望していた進学をあきらめざるを得なかった^{くや}悔しい経験をしている。

その後は、3か年武知塾や高市塾で学んだ後、母親の教えに従って、1907年（明治40）、南伊予村役場の書記となった。1911年（明治44）には収入役、続いて助役を歴任し、1921年（大正10）、36歳の若さで村長となった。

15年間の役場勤めの間に、日本や世界の動向、県下各地の情勢、南伊予村の現状や課題等について見識を深め、村長の果たすべき使命や責務について、惣五郎なりの思想や信条・哲学といったものを培っていったと考えられる。

そして、長年にわり懸案となっていた水問題を解決するには、大谷川を堰き止め、一大貯水池を築く以外に最善の策はないと判断し、決断するに至ったと推測される。そのことは、次の決意表明からも窺える。

これを放っておいて、何の村政か。成否はもとより天にあり。われ死すとも辞せず。必ずや大谷池を築造して災害を根絶し、住民の苦しみを救ってみせる。一切の責任は一身に負う。

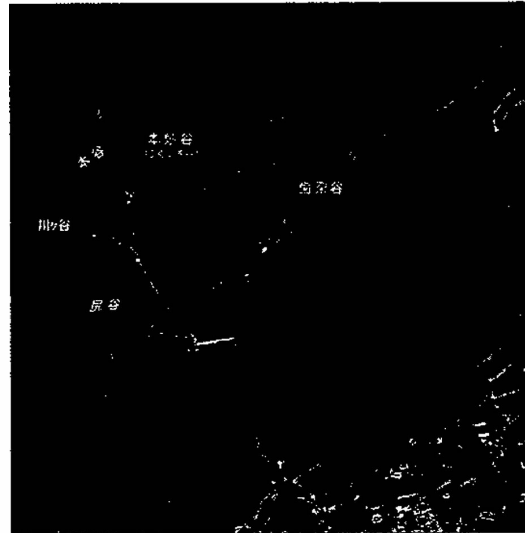
(3) 惣五郎が構想した大谷池

大谷池の築造を決意した翌年の1924年（大正13）には、さっそく隣接する北伊予村・郡中町・松前町の3か町村に働きかけ、4か町村で耕地整理組合を組織し、自ら初代組合

長となりその実現に奔走した。

(※ 耕地整理組合は、「土地改良施行法」の規定により、1952年(昭和27)に「伊豫郡大谷池土地改良区」に名称を変更した。)

武智惣五郎を中心に耕地整理組合が構想した大谷池の規模は、概略、次のようなものであった。これは、計画書等から要点のみを抜粋したものであり、完成時の規模とは多少の差異がある。



大谷池の水源

① 水源

- 水源は、大谷川に流出する
しだた ほんまう
る園菜谷・本妙谷・本谷・川ヶ谷・尻谷の5つの谷水とする。
- 補助水源として、砥部川支流の村川から非灌漑期(10月中旬より翌年5月までの8か月間)に限って流水をもらう。(※ 現在は廃止されている。)

② 受益面積 約650ha

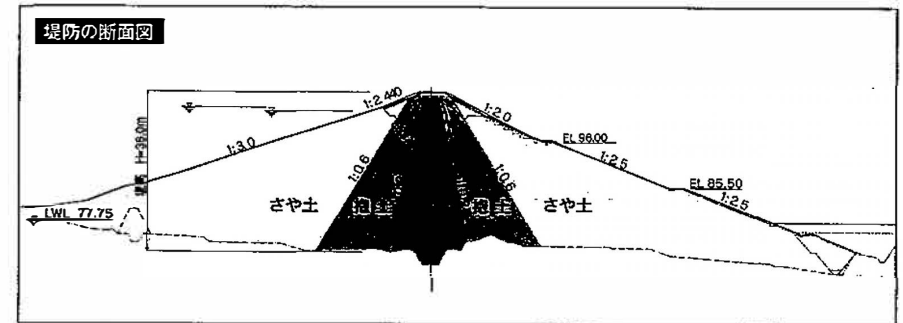
内訳は、南伊予村430ha、北伊予村30ha、
松前町40ha、郡中町150ha。

③ 貯水量 約180万 m^3 (約180万トン)

40余りある既存のため池の総貯水量(約103万 m^3)の約2倍。

④ 堤防の規模

- 堤防は、盛り土による土堰堤とする。盛り土の総量は、約369万 m^3 。
- 堤防の高さは38m、堤防の長さは190m。
- 180万 m^3 (180万トン)の水圧に耐えられるよう、堤防の底幅は190m、頂上幅は5mとする。
- 堤防からの漏水を防ぐために、中心部に刃金土(最も質のよい粘土)を入れる。
ろうすい はがねつち
上幅は3.6m、下幅は16.2m。



- 堤防が波浪などによって侵食されないよう、内側の法面を石張りにする。石張りの面積は、14,000 m^2 。

⑤ 離れた受益地への配水路の設置

- 東部の受益地へは、宮下の新池まで約3,000mの配水路を造り、10か所からため池等に配水する。
- 西部の受益地へは、上吾川の十合池まで約2,200mの配水路を造り、17か所からため池等に配水する。

⑥ 総事業費

約67万円

⑦ 工事期間

1932年(昭和7)から1936年(昭和11)の5か年計画。

(4) 地域住民や県への働きかけ

惣五郎は、上記の構想をもとに設計図や計画書を作成し、地域住民や県に対し大谷池築造の必要性を説いて回った。

その当時、盛り土による堤防の高さは、せいぜい15m~16mまでと考えられていた。ところが、惣五郎が考えた堤防の高さは、その2倍を超える38mで、これまでに前例のない日本一高い大規模なものであった。そこに、この地域にある40余りのため池の総貯水量(103万 m^3)の2倍に近い180万 m^3 もの水を溜めようとする構想であった。

この構想に対して、その実現性を疑問視する声が多く出された。

- 土質・岩質ともにもろいことが分かっているが、なぜ、そんなに高い堤防が築けるのか。
 - 盛り土だけで、180万 m^3 （180万トン）もの水圧に耐えられる堤防を築くことが果たして可能なのか。
 - もろい土質や岩質に対して、どのようにして漏水を防ぐのか。
 - 宮下・上野・下三谷・上吾川等、離れた地域にある受益地へ、どのようにして配水するのか。本当に配水はできるのか。
- 等々の疑問点や問題点が出された。これらの疑問に対して、次のように説明し、説得して回った。
- 堤防の底幅を190m、頂上の幅を5mとし、富士山のように裾野の広い堤防を築き、水圧に耐えられるようにする。
 - 堤防の中心部に刃金土（最も質のよい粘土）を入れる。上部は3.6m、下部は16.2mの幅で刃金土を入れて漏水を防ぐ。
 - 東部と西部の受益地への配水路は、大谷池が完成する前に必ず造る。そうすれば、離れた地域の住民にも納得してもらえるはずである。

こうした説明を繰り返し行い、賛同者や協力者を募っていった。ところが、こうした努力にも関わらず、県議会議員の選挙の際には、「大谷池は絶対に見込みがない。無謀な企てである。」と演説して回った議員もいたとのことである。

地域住民の中にも、「もし、自分たちの所へ本当に水が来たら、俺が郡中の海まで逆立ちして歩いて見せる。」と言った人もいたとのことである。

こうした非難や中傷に対して、惣五郎は次のように言って説得した。

計画の冒険なることは元より覚悟である。死力を尽くして工事に万全を期し、これを実現する。出来るかどうかは天に任す。失敗したら大谷の土になっておわびをする。

こうした説得にもかかわらず、理解や協力は容易には得られず、歳月のみが過ぎ去っていった。

そうした中で、1930年（昭和5）8月、この地域を大旱魃が襲った。大谷川流域650haのうち135haが収穫皆無、あるいは7割以上の減収という悲惨な有様であった。

旱魃による惨状の様子を視察するために笹井幸一郎知事が訪れた。多くの農民は沿道

で堵列（垣のように並ぶこと）して迎え、涙ながらに窮状を訴えた。民政党や政友会の県本部からも見舞いに訪れた。

惨状の深刻さを察した笹井知事は、時を待たず1930年（昭和5）11月の県議会に、大谷池築造に関する議案を提出。しかし、多数派を占める政友会所属の議員によって否決されてしまった。

（5）国への働きかけ

党派間の対立が続く県議会に頼っていたのでは実現不可能と判断した惣五郎（民政党）は、国に直接働きかけることを決意し、上京して大谷池築造の必要性を訴えた。笹井知事（民政党）も、県議会に提出した資料を持って上京し、政府に説明した。さらに、当時の政府が民政党の浜口雄幸内閣であったことから、地元選出の衆議院議員、武知勇記（民政党）に、政府に働きかけてくれるよう依頼した。武知議員は直ちに内務大臣安達謙造に申訴した。

こうした働きかけが功を奏し、1931年（昭和6）1月22日、「県議会の議決は公益に害するにより、大谷池築造について原案の執行を命ずる」との内務省令が出され、国から工事執行の許可がおりた。

惣五郎が築造を決意してから10年、ようやく念願の工事の着工にこぎつけることが出来たのである。

6 難渋をきわめた工事

1931年（昭和6）12月15日、笹井幸一郎知事を現地に迎えて、県主催の起工式（地鎮祭）が盛大に挙行された。翌年の1932年（昭和7）には、県営用排水改良事業として工事が開始された。工事は契約により、武智惣五郎を組合長とする「伊予郡南伊予村外3か町村用排水改良工事組合」が請け負うこととなった。

大型の建設機械もなく、県からブルドーザーを1台借りただけで、他は、369万 m^3 もの土砂を、つるはしで岩をくだき、じょうれんでトロロッコに積み、トロロッコで堤防まで運び、いのこ石で土を突き固めるといった、気が遠くなるような人海戦術による工事であった。

ところが、工事を開始して2年目の1934年（昭和9）8月、室戸台風による大水害に見舞

われた。これまでの工事で完成途上にあった仮締め切りの工事や床掘りなどの基礎工事が殆ど流失埋没するという大被害を被ってしまった。思いもよらない被害と多年にわた



る心労が重なり、武智惣五郎は一時病床に臥した。

さらに、もろい地質を調査する必要にも迫られ、1935年（昭和10）、東京帝国大学の地質学の権威、堀田教授を招き地質調査をした。その結果、「岩層に沿って水が流れており、満水になればその水圧で漏水し、上三谷の原、上野上郷の家屋敷や耕地はだめになる。」との指摘を受けた。

この指摘によって、漏水を防止するために流状セメントを注入する新たな工事が必要となり、工事費の追加も必要となった。こうした事情から、上吾川と下吾川がこの事業から脱退した。

脆弱な地質による難工事のうえに、資金の調達難、日中戦争に続く太平洋戦争の戦時下にあったことから、火薬、鉄材、セメント、石灰等の資材の不足や出兵・学徒動員による労働力の不足も重なり、いつ出来るのか見通しもつかないまま、二度の計画変更を

余儀なくされてしまった。

こうした幾多の困難に遭遇する中で、親族が会議を開き、「今のうちに財産の整理をすれば何とか生活できる」と、泥沼のような工事から手を引かせようとの話し合いが持たれたという。母親のシズだけは、次のように言って励まし続けた。

自分一人のことではなく、万人のために決意したことだから、最後までやり遂げなさい。家のことは心配しなくてよい。

母親の叱咤激励により、改めて勇気を奮い起こし、初心貫徹の意志を固め、自らに鞭打ちながら難工事に取り組んだ。

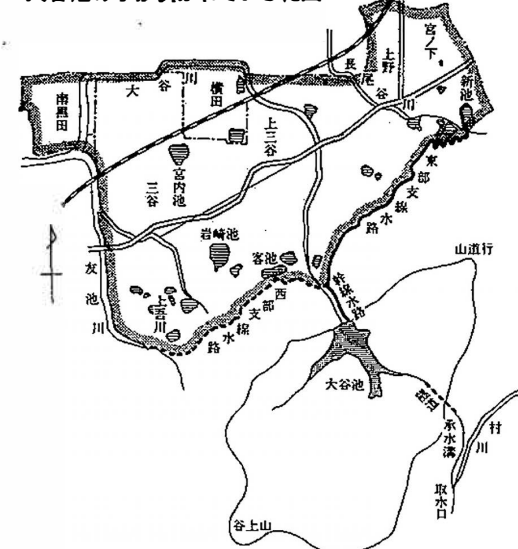
工事に従事された栗田宗明は、その当時を振り返り、次のように述べている。

家計を支える手助けを兼ねて働きに行きました。1日働いて、日当は1円10銭でした。仕事は危険を伴う大変なものでした。3人が1組になり、堤防から700～800m奥の土取り場から、土砂をトロッコに積み、40kmくらいの速さで駆け下ったり、堤防まで押し上げたりする仕事でした。私も土砂をトロッコに積み上げているとき、突然崩れ落ちてきた土砂の下敷きになって意識不明になり6か月余りも入院しました。幸い元気になりましたが、しばらくして、工事途中で出兵をしました。

幸いなことに、1942年（昭和17）からは、県の支援によって、「伊予郡南伊予村外3か町村用排水改良工事組合」が請け負っていた工事を、県の直営方式で残工事が進められることとなった。

そして遂に、1945年（昭和20）、終戦の年に待望の大谷池が完成した。惣五郎が決意してから24年、工事を開始してから14年という長い歳月を経ての完成であっ

大谷池の水が引かれている範囲 縮尺 二万分之五



武智惣五郎氏頌徳碑

愛媛縣知事 青木重臣書

武智惣五郎君ハ愛媛縣伊豫郡南伊豫村上三谷ノ人ナリ資性俊敏頗ル公共心ニ富ム南伊豫村々長ノ職ニ在ルコト二十有餘年其ノ間伊豫郡町村長會々長愛媛縣町村長會々長全國町村長會理事ニ選バレ更ニ愛媛縣會議員トシテ縣政ニ參與シタリ殊ニ心ヲ産業ノ發展ニ注ギ自治ノ振興ニ貢獻セシコト枚擧ニ邊アラズ就中大谷池ノ築造ハ實ニ君ノ創始完成セシ所ナリ惟フニ南伊豫村外三箇町村ハ古來灌溉水ニ乏シクシテ旱害頻ニ至リ大谷川ノ氾濫ニヨリ水害モ亦多ク該地區住民ノ困憊實ニ名状スベカラサルモノアリ君座視スルニ忍ビストナシ其ノ水源池ニ水壘三十万立方坪ヲ貯溜スベキ大谷池ノ築造ヲ企テタリ時正ニ大正十二年君年齒三十八歳ナリキ翌十三年南伊豫村外三箇町村耕地整理組合ヲ興シ其ノ實現ニ努ム蓋シ其ノ事業タルヤ縣下唯一ノ大貯水池ニシテ其ノ土堰堤ハ我が國ニ於ケル最高ノモノナレバ到底不可能ノ事業ナリトノ論議渺カラズ加之當時政黨ノ争ヒ熾烈ヲ極メタレバ工事ノ實施容易ナラザルモノアリ君慨然トシテ曰ク成否ハ國ヨリ天ニ在リ吾レ死ストモ辞セズト或ハ内ニ諮リ或ハ外ニ説キ苦心經營スルコト正二十年漸ク各方面ノ支援ヲ受ケ昭和六年之ヲ縣宮ニ移管ス依テ更ニ關係地區用排水改良工事組合ヲ組織シ翌七年愈々第一期導水溝工事ニ着手竣功セリ然ルニ翌八年第二期工事ニ移ルヤ岩層ト土質トノ關係ヨリシテ工事ニ支障ヲ來シタルノミナラズ昭和九年ニハ不慮ノ大水害アリ為メニ既成ノ基礎工事ハ全ク画餅ニ歸スルノ已ムナキニ至レリ君猶屈セズ着々其ノ工ヲ進ムト雖モ規模宏大ニシテ所要資材ノ巨額ナルト岩層ト土質トノ關係ニヨリ工事ノ至難ナルトハ背テ其ノ進展阻礙セシメシガ君ハ殆ド寝食ヲ忘レテ事ニ從ヒ昭和二十年三月ニ至リ漸ク完成ノ慶ニ接ス其ノ工ヲ起シテヨリ正二十有餘年ノ星霜ヲ經タリ之ヨリシテ礪礪ノ地忽チ豊穰ノ沃土ト化シ農産物ノ増進期シテ俟ツベキヲ見ル是レ一ニ君ノ卓見ト至誠トノ實ニシテ餘澤遠ク後世ニ及フ其ノ功實ニ偉ナリト謂フベシ因テ茲ニ此ノ碑ヲ建テ功ヲ勸シテ其ノ徳ヲ不朽ニ傳フ

愛媛縣伊豫郡南伊豫村外三箇町村耕地整理組合

昭和二十三年八月

大谷池記念

若槻禮次郎書

大谷池ノ灌漑地區ハ古來用水ノ窮乏裕カナラズ旱害疊々至ル加之大谷川時ニ氾濫シテ地區民ノ困憊名状スベカラザルモノアリ此ニ於テコレガ災禍ヲ永遠ニ防止シテ農産物ノ増進ヲ圖ラント大正十二年南伊豫村長武智惣五郎氏大谷池ノ築造ヲ發起シ全十三年四月南伊豫村外三ヶ町村耕地整理組合ヲ組織シテ其ノ實現ニ努ム昭和六年ニ至リコレヲ縣宮ニ移シ更ニ全十三年十二月關係地區用排水改良工事組合ヲ興シ翌七年一月第一期導水溝工事ヲ創メ全十三年五月竣工セリカクテ昭和八年八月ニ及ビ第二期築堤工事ニ着手セシガ昭和九年偶々地方稀有ノ大水害アリ基礎工事ハ殆んど盡餅ニ歸ス然レドモ是レニ屈セズ着々工ヲ追テテ蓋シ該工事ハ岩層ト土質トノ關係上實ニ難工事ナリシガ漸ク茲ニ完成ノ慶ニ接スルヲ得タリ時ニ昭和二十年三月ナリ依テ大谷池ノ概要ヲ記スコト左ノ如シ

一堤防直立高 百十六尺五寸 一堤防延長 百十間 一堤防底巾 百十間
一堤防盛土 六万一千四百立方坪 一堤防勾配内法面 三割 外法面上段 二割
中下段 二割五分 一堤内部石壘面積 四千二百面坪 一水深 八十四尺四寸
一貯水量 三十万立方坪 一導水溝延長 八百六十五間 内隧道 三百三十三間
一灌漑面積 五百七十町歩 一工事ニ従事シタル延人員 三十七万二千七百八
昭和二十一年十月建之

た。5か年で完成する予定の工事が、その3倍近い14年もかかってしまったのである。いかに難工事だったかが分かる。この間に工事に従事した人数は、延べ37万3千人にものぼった。

なお、工事着工前に地域住民と約束していた、東部と西部への配水路の設置工事は、1940年（昭和15）～1941年（昭和16）の2か年をかけて完成していた。

大谷池が完成した喜びを、栗田宗明は、次のように回想している。

工事の途中で出兵をしましたが、終戦を迎え復員して訪れてみると、大谷池が立派に出来上がっていました。

伊予幼稚園の北あたり一面のきび畑など、多くの畑が水田に変わっていました。秋には稲穂が実るようになっていました。これも大谷池が出来たお陰です。

大谷池の完成によって、19.8ha（宮下0.3ha、上野7.2ha、上三谷11.2ha、下三谷1.1ha）もの畑が水田に転換できた。惣五郎をはじめ地域住民の長年にわたる悲願がここに結実したのである。

7 竣工式の挙行

1945年（昭和20）4月12日、雪澤千代治知事を迎え、盛大に竣工式が挙行された。

1946年（昭和21）10月には、堤防左岸の道路沿いに、総理大臣若槻礼次郎の揮毫による「大谷池記念碑」が建立された。その西隣りには、1948年（昭和23）8月、愛媛県知事青木重臣の揮毫による「武智惣五郎頌徳碑」が、南伊予村・北伊予村・松

前町・郡中町の4か町村耕地整理組合によって建立された。その碑文に、次の一節がある。

(現代語訳) これは、一に君の卓見と至誠の賜物であり、その恩恵は、全ての地域住民をはじめとして、後世の世まで及ぶものであり、その功績は実に偉大である。ここに、この碑を建て、その功績を刻みこみ、その徳を不朽に伝えるものである。

「武智惣五郎といえば大谷池、大谷池といえば武智惣五郎」と、一対の言葉で語られることがある。これは、「武智惣五郎がいたからこそ大谷池ができた。惣五郎あっての大谷池である。」ということを強調し賞賛しての表現である。

武智惣五郎は、時代の要請を担って登場し、時代の要求に応えるためにこの地に生を受けた人物であった。遠大な構想と卓越した手腕、不撓不屈の精神でもって幾多の困難を克服し、遂に大谷池を完成させた。そして、今日の地域発展の礎を築いたのである。

惣五郎の偉業に対して、1959年(昭和34)には、藍綬褒章、1962年(昭和37)には、従六位勲六等旭日賞が授与され、その功績を永遠に称えている。

8 立ち退きを強いられた人たちの想い

大谷池の築造に際して、3町1反4畝28歩(3.1428ha)の田畑が水没した。さらに、長年にわたって住み慣れた家屋敷から7戸が立ち退きを強いられた。その人たちが当時を回想して、次のようにその想いを述べている。

大谷ます子は、その著『伊予の風』の中で、次のように述懐している。

大谷の高みからは瀬戸内海が見える山懐で、一種の桃源郷のようなところでした。一族、4〜5軒が寄り添うようにして暮らしていました。そこは、山青く、水清らかで、風の音、水の流れ、豊かな緑に包まれて、人々は生き物たちと親しくつき合い、貧しくてもよく働き、遊び、ゆったりとした時が流れていました。

幼い時のその生活体験は、時がたつにつれて、私の中で掛けがえのない宝物になっていったように思います。今は、池の底になっていますが思い出はつきません。

大谷ます子は、ふるさとを愛する一念から、1996年(平成8)、武智惣五郎記念碑の東50mの場所に、「山青く、水清らかに風渡る、大谷は心のふる里」と自筆で刻んだ歌碑を、私費を投じて建立された。

大谷池の近くに住居を構えられた方は、その想いを次のように語っている。

ふるさとがなくなるようで、立ち退くのはいやでした。でも、大谷池ができてたくさん土地に水が行くようになり、みんなのためになったと、今ではよかったと思っています。私は、ふるさとを離れたくなかったので、今も大谷池の近くに住んでいます。

大谷池完成の陰には、住み慣れた土地を離れた7戸の家族がいたこと。工事中の崩落事故で3名の犠牲者が出たこと。こうした尊い犠牲を伴っての完成であったことを忘れてはならない。

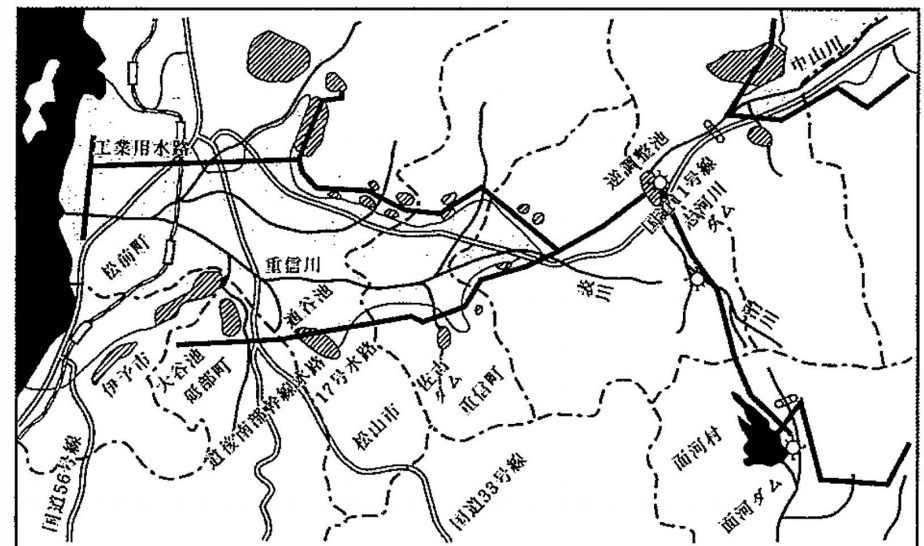
なお、3名を祀る供養塔は、1944年(昭和19)12月24日、龍王社のそばに建立された。

9 大谷池の発展

(1) 面河ダムからの導水

大谷池の完成で、水不足に苦しむことは少なくなったが、大谷池の水が利用できない旧北山崎村と旧郡中町では灌漑用水が不足していた。地元選出の県会議員、沖喜予市は、面河ダムから年間160万m³の水を引くことを発案。1967年(昭和42)国営道前道後平野農業水利事業によって、1970年(昭和45)、面河ダムからの導水が実現した。

面河ダムからの導水



大谷池は、道前道後用水の調整池としての新たな役割を担い、面河ダム→通谷池→大谷池→12号水路→森川を通じて、旧北山崎村と旧郡中町に配水できるようになった。これによって、大谷池の灌漑面積は、1,100haに拡大し、伊予市と松前町を受益地とする「大水がめ」として大きな役割を果たすこととなった。

面河ダムからの導水に貢献した沖喜予市の頌徳碑は、道後平野と大谷池が見渡せる谷上山の釣鐘堂の近くに建立された。その碑文には、「石鎚の水よ よくここまで来てくれた ごくろうさん」と刻まれている。

(※ 大谷池から上吾川十合池まで延びていた西部用水路は、面河ダムからの水が来るようになってからは森川まで延長(6,340m)し、「12号水路」と呼ぶようになった。)

(2) 堤体の大改修

完成から半世紀以上が経過すると老朽化も顕著になり、堤体などから漏水するようになった。2000年(平成12)から堤体の大改修工事に着手し、2005年(平成17)に完成した。ここに県下最大のため池にふさわしい施設として再び甦ったのである。

2006年(平成18)5月18日、加戸守行知事を現地に迎え、県営ため池等整備事業大谷地区竣工記念式典が盛大に挙行された。武智惣五郎頌徳碑の近くには、加戸守行知事揮毫による記念碑「甦る大谷の塘」が建立された。

大谷池改修工事の概要(平成12年9月22日)

- 1 事業名 県営ため池等整備事業(老朽ため池整備工事)
- 2 事業主体 愛媛県
- 3 ため池概要 受益面積 1,000.3ha 受益戸数1,804戸
貯水量 1,759,000m³
- 4 工期 平成12年度～平成17年度(6か年)
- 5 総事業費 10億2千9百万円
- 6 補助率 国55% 県25% 地元20%
- 7 その他 堤防に植えていた桜の木24本は、松前町神崎の福德公園に移植。
龍王社の移転。